

FUKUOKA

①

②

③

④

⑤

事例2 北九州家守舎のまちづくり活動

まちのきよてん ①



< MIKAGE1881 > シェアオフィス
MIKAGE1881は九州家守舎と株式会社松永不動産（北九州市小倉北区魚町二丁目）が共同で開設した、クリエイティブ事業者のためのスモールオフィス・コワーキングスペースを備えた新しいワークスペース。2012年10月に施設利用を開始。

まちのきよてん ②



<メルカート三番街> 新しい商業施設
メルカート三番街は、家守の思想に従い、今ある資源を活かしつつ、新たな発想でもって既存の建物の価値を向上させる新しい商業施設だ。小倉中心市街地活性化のための一つのモデルケースとなるべきものを目指して運営され、クリエイティブな若者が集まる。

まちのきよてん ③



<フォルム三番街> シェアオフィス
中屋興産株式会社が所有する魚町三番街ビルの文化発信の複合スペース。この地で37年間営業し2010年1月に閉じた婦人服販売店に残されていた当時の什器、備品などの資源資材をリペアし、クリエイターや若い起業家のためのインキュベーションスペースとして活用する、クリエイターと街の人たちの参加型プログラムでもある。

まちのきよてん ④



<ポポラート三番街> 雑貨マーケット
ポポラート三番街は、魚町銀天街にある中屋興産株式会社が所有する中屋ビル魚町三番街の区画を活用した新たなクリエイティブコミュニティの拠点だ。家具、雑貨、アクセサリ、服飾、アートなど、「自分の手でつくる」40名の作家が集まって、この場所できり、販売する。人とクリエイションの交流拠点。

まちのきよてん ⑤



<うおまちのにわ三木屋> 町家改修利用
うおまちにわ 三木屋は、株式会社北九州家守舎と有限会社ミキプランニング（北九州市小倉北区魚町三丁目）が、三木屋ビル裏手の築六十年を超える木造住宅とその中庭部分を、まちなかの新しいタイプのレンタルスペース「三木屋」として共同で整備し、運営を開始した施設だ。まちなかで風情が楽しめるカフェも運営される。

雑貨市



<よりみち市 @ サンロード商店街>
魚町サンロードでは、不定期に手づくり作家によるフリーマーケットであるよりみち市が開催される。既存店の軒先を使い、北九州市とその近郊で創作を行う作家さんが対面販売し、作品の魅力をお客さんに直接つたえるマーケット。

北九州家守舎（きたきゅうしゅうやもりしゃ）
【名称】株式会社 北九州家守舎 Kitakyushu Yamorisha Co.,Ltd
【事業内容】北九州市内の遊休不動産を活用したエリアマネジメント
【所在地】北九州市小倉北区魚町二丁目1番7号 ACT 松永ビル 5F
【設立日】2012年4月13日 【資本金】460万円

まずは先駆者に学ぼう！

雑貨でまちづくりを考える。今回はまず、大阪枚方市で平成19年から開催され三百を超える出店数を誇る「枚方宿くわらんか五六市」、北九州の市街地活性化をリノベーション、シェアといった全く新しい手法で展開する「北九州家守舎」の視察から、面的に展開する雑貨でのまちづくりを紹介する。双方とも、雑貨市と拠点整備を連動させ、チャレンジショップと継続出店という出店段階を提供している。

OSAKA

①



事例1 ひらかたの雑貨市

まちのきよてん ①



<56un> チャレンジショップ
「今は自分のお店はないけれど、いつかはお店を持ちたい！」という人のためのチャレンジショップ。物品販売と合わせて展示会やワークショップも開催できる。一日単位から利用することができる。

まちのきよてん ②



<枚方鍵屋別館> 小規模雑貨店舗
五六市で賑わう枚方宿歴史街道沿いにある枚方鍵屋別館。枚方公園駅から徒歩すぐのこだわり雑貨、カフェ、食品などのお店が10店舗以上集まっている新しいコンセプトの商業施設。

雑貨市



<枚方くわらんか五六市>
京阪枚方市駅と枚方公園駅間の街道沿いで開催される雑貨市。駐車場や店先を使ってまち全体に展開される。

枚方五六市（ひらかたじゅくごろくいち）
【開催日】毎月第2日曜日 【開催時間】10時～16時
【開催場所】枚方宿地区（京阪電車枚方市駅～枚方公園駅間の街道沿い等）の公園や駐車場等 ※出店参加費は、枚方宿くわらんか五六市の運営と枚方宿のまちづくりに役立てられる。

見つけよう！ 雑貨で 街を



前号まで肴町、子育てをテーマにまちづくりの切り口を紹介してきました。今回のテーマは「雑貨」です。11月9日、10日に行われたたま市レポートを中心に雑貨でのまちづくりをお届けします。

浜松まちなかにぎわい協議会が考えていること

浜松まちなかに
ぎわい協議会が
考えていること

「話題沸騰！まるたま市」取材レポート



まるたま市 着町マップ

ゆりの木通り

野外会場 (エコパーク東側)

野外会場 (丸喜屋商店東向かい)

着町公会堂 (メイン会場)

サテライト会場

にぎわいをみせる当日の着町

エコパーク

野外会場

たぬき

着町

公会堂

有楽街

大安寺通り

サテライト会場

着町小路

サテライト会場では、テナントスペースまるごと一室を使い、五組の作家と建築家が協働して空間を作り上げ、テナント出店の次のステップとしてのテナント利用のイメージを实践した。建築家金子敦史さんによる空間デザインは細かな木の端材を床に敷き詰め、小さな地形を室内に作り出している。作家の作品はその丘にちりばめられた。▼



次回開催の問い合わせ
まるたま市実行委員会
053-459-4320 / marutamaichi@gmail.com

サテライト会場内

11月9日、10日と浜松着町の各所でぎわい協議会が運営に関わる、まるたま市実行委員会主催の雑貨市「まるたま市」が開催され、会場は60店以上の出店者と多くの来場者で賑わった。まちなかの複数の場所で展開された今回のイベントは、まちなかに新しい回遊性をもたらし、その可能性を感じさせた。出店作家の一人、しゃからろうそくさんは、「面白かったです。店舗を皆で作って、ガラス張りということもあって人から見てもらえるし、作家も個性がある人が集まったので。全体としても活気があって、普段からこのような場所がまちなかにあって人が来てくれればいいと思います。」と手応えを口にし、継続開催へ意欲を見せた。次回は来年4月開催が決まっているという。継続的な開催と段階的に育っていく雑貨をきっかけにした新しいまちの動きにむけて、今から楽しみだ。



浜松まちなかにぎわい協議会が考えていること



浜松・肴町で始まる 新しい雑貨市

「まるたま市」

仕掛け人に迫る！



11月9日（土）、10日（日）に開催された新しい雑貨マーケットのあり方を体現するまるたま市。その仕掛け人の二人、レザークラフト作家の久保田善洋さん、建築家の金子敦史さんに話を伺った。
聞き手 メディアプロジェクト・アンテナ辻塚磨

まるたま市に関わった経緯

辻 まずはお二人の自己紹介から話を聞かせてください。

久保田善洋（以下久保田） 出身は浜松で、大学時代は金沢で、比較宗教学を専攻していました。そこから巡り巡って、レザークラフト作家に落ち着ちつきました。昨年の11月からはインフォラウンジのスタッフとしても活動しています。レザークラフトは、基本的には小物類、余った革でアクセサリを作っています。

金子敦史（以下金子） 自分は浜松、旧浜北市出身で、19から東京に出て建築を勉強しています。途中オーストリアのウィーンに留学して、大学院を休学しながら向こうの大学にいきながら働いていました。27で大学院を卒業後、たまたま住宅の設計の仕事、家具の仕事を受けて、もう就職せずに独立してしまおうと。

辻 まるたま市にかかわるようになった経緯はどのようなものだったんですか。

久保田 去年の10月に鴨園という雑貨市を鴨江別館で主催したこともあり、雑貨市の主催経験が

あって暇そうな人、ということとで白羽の矢がたつたのでしよう（笑）。

金子 去年末の浜松の建築デザイン系の方が集まる懇親会で、にぎわいの吉林さんに質問攻めにあっただんです。その後、6月の中旬に突然電話がかかってきてちょっと遊びにいいかと言われ、そしたらなにかやってみないかと。久保田さんとはこれがきっかけで知り合いました。

街を盛り上げるまるたま市

辻 まるたま市についてもう少し具体的に教えてください。

金子 まるたま市は収益ベースの雑貨市というより、街を盛り上げる一環として街の担い手を育成していくイベントです。11月1日現在、参加店舗は60店舗以上で、公会堂、駐車場が2カ所、空きテナント、という4会場で面的に展開していくと考えています。出店者は市外の方もいますが、浜松の方が多くですね。

辻 まるたま市の準備で特に意識したところはどんなところですか。

久保田 協議会が広告を打った、

新聞広告約30万部、チラシ約1万枚という数に度肝を抜かれました。そこで初めてこれはただ事ではないなと思いました。

金子 会場構成で気にしたのは、全体像というよりも人がにぎわって見えるようにするにはどうしようかということ。参加者が街の中にお店を出したくなるということと、今まで見据えていて、テントへの出店がファーストステップ、空テナントの活用がセカンドステップ、実際にお店を出す形がサードステップという位置づけです。最終的にはまるたま市自体も空きテナントを使って開催したいです。

これからのまちなか商業のかたち

辻 まちなかにおいてのまるたま市の位置づけはどのようなところにあるのでしょうか。

久保田 大きくまとまったイベントというより、各会場で小さなイベントで同日開催した方が面白いんじゃないかとも思います。一番苦労するのが広報なので、そのまともをにぎわいがやればいい。身の丈にあった、隅々まで目が届く幸せな空間がまちなかにいくつもあればいいだろうと思うんです。

金子 なんとなくのネットワークがあればいいと思います。生活の場を前提にして子育て、雑貨といったいろいろなコンテンツが同時多発的に起こっていくことが一つのビジョンかなと。それらがどうつながりを持てるのか。

辻 なるほど。これからのまちなかに期待することはなんでしょう。

金子 先日、IKEAに行ったときにびっくりしたことは、お客さんが商品からかなり離れた場所から、あれほしいうって購入を決めていたんです。ものに対する距離感が遠いんですね。イオンの距離感では中間で、それらに対してまちなかの距離感に近い。物に対するレンジが選べるようになっていく状況は理想的だと思います。

久保田 私の立脚点は宗教学と民俗学、その観点からみるとまちなかは面白い。効率化ではない方向を担保できるのはまちなかの商店街しかない気がしてきました。現状だと選択肢がないだけなんだと思います。クラフト一つとっても、昨日始めたばかりの人から職人までなだらかにつなげたい。まるたま市はその出発点にあたると思います。

（11月1日 浜松まちなかにぎわい協議会事務局にて収録）



生活の場を前提にして子育て、雑貨といったいろいろなコンテンツが同時多発的に起こっていくことが一つのビジョン



久保田 善洋／くぼたよしひろ（写真左）
1978年浜松市生まれ。塾講師、雑貨店スタッフ等を経て現在はレザークラフト作家。作家活動の傍ら、雑貨市や、坂巡りツアー、地蔵巡りツアーなどを主催している。

金子 敦史／かねこあつし（写真右）
浜松市（旧浜北市）出身。東京やウィーンで建築を学び、2012年に金子敦史建築計画工房を設立。住宅設計を中心に店舗、家具、ランドスケープ、インсталレーション等の設計活動を展開。



隅々まで目が届く幸せな空間がまちなかにいくつもあればいい。